A Report of the Special Exhibition by Students at Kanazawa University Museum in 2019, “IROHA: The World of Colors Seen from Various Technologies”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: OKABE, Mutsumi, MATSUNAGA, Atsushi, SUGAWARA, Hirohumi, KAWAI, Nozomu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00061601

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

学生による企画展の報告
「いろは―多彩な技術から見る色の世界―」

A Report of the Special Exhibition
by Students at Kanazawa University Museum in 2019,
"IROHA:
The World of Colors Seen from Various Technologies"

岡部睦(1)、松永篤知(2)、菅原裕文(3)、河合望(4)

Mutsumi OKABE,
Atsushi MATSUNAGA, Hirohumi SUGAWARA, Nozomu KAWAI

(1) 金沢大学大学院　人間社会環境研究科　博士前期課程
Master's Course, Human and Socio-Environmental Studies, Kanazawa University
(2) 金沢大学資料館
Kanazawa University Museum, Kanazawa University
(3) 金沢大学　人間社会研究域　歴史言語文化学系
Faculty of Letters, Institute of Human and Social Sciences, Kanazawa University
(4) 金沢大学　新学術創成研究機構　金沢大学資料館副館長
Institute for the Frontier Science Initiative and Kanazawa University Museum, Kanazawa University

Abstract

In this article, we look back on the student's exhibition "IROHA: The World of Colors Seen from Various Technologies," at Kanazawa University (18/11/2019-28/01/2020) and it will be evaluated by the students who actuary participated in this exhibition program. Kawai and Sugawara introduce this article, presenting the background of the special exhibition by the students at Kanazawa University as a part of the class "Museum Training" and the overview of the class schedule. Okabe present Chapter 2-6. In Chapter 2, Okabe explains the idea of this exhibition, and provides selection and research of the materials in Chapter 3, focuses on the display of the exhibition in Chapter 4, describes on the exhibition devices in Chapter 5, discuses related events in Chapter 6. Finally, Matsunaga, who cooperated as a curator of Kanazawa University Museum, considers this significance of the special exhibition conducted by the students in the University Museum.

1. はじめに ー博物館実習と学生による企画展

金沢大学では2014年以来、「博物館実習」の授業の一環として学生による企画展を開催してきた。文部科学省による博物館実習ガイドライン（2009年度版）では２単位相当の学内実習および１単位相当の館園実習が推奨されている[1]。これまで学生企画展は、学内実習の一部として位置づけられ、館園実習は学外の博物館・美術館で行われていたが、金沢大学資料館が2016年４月に北陸の大学で初めて博物館相当施設に指定され、学生企画展の内容も館園実習の内容に匹敵することから、金沢大学資料館のご協力により2019年度より学生企画展の実施を以て館園実習を行ったことになると認定された。

金沢大学資料館は、1989年の開館より学芸員養成課程への協力と連携を行なってきたが[2]、学生による企画展が開催されたのは2014年の「植物図「館」」が最初である[3]。以降、翌2015年度には「破かれた恋愛小説～『寒潮』に翻弄された四高生」[4]、2016年度には本学が所蔵する物理実験機器を紹介した「ハカリモノー文系学生が紹介する科学実験機器」[5]、2017年度には金沢大学の伝統的な学生寮であった北溟寮の閉鎖を承けて、100年あまりにおよぶ本学学生寮の歴史・伝統を紹介した「バンカラ寮生類」[6]、2018年度には金沢大学資料館が所蔵する資料がどのような経緯を経て資料館に所蔵されるに至ったのか、収蔵資料の「数奇な」来歴にスポットライトを当てた「物録（モノローグ）ー資料たちの波瀾万丈な「モノ」ガタリ」と続いた[7]。

本稿で論じる2019年度の学生企画展は、以上に紹介した展覧会に続く、６度目の学生企画展「いろは―多彩な技術から見る色の世界―」である。この企画展は、金沢大学資料館、金沢大学附属図書館、金沢大学埋蔵文化財調査センターが所蔵する資料を彩る「色」に着目し、金沢や金沢大学にゆかりのある資料を赤・青・金の3色に分け、資料の彩色に利用されている技術や原材料などを紹介することを目的とした展覧会である。通常の展覧会では、モノ資料の歴史的、文化的価値について焦点が当てられることが多いが、色に着目して、どのような材料からどのようにして色彩が生成されるのかという、文化的な意味だけでなく理化学的な内容にも踏み込んだ文理融合的な内容となった画期的な学生企画展であった。また、来館者参加型の写真展も行なう工夫も凝らされた。学生企画展に伴う教育普及活動では、ミュージアム・ツアーや「野菜の絵の具づくり」のワークショップも行い学生企画展の内容を展示のみではなく対面形式のコミュニケーションや実習活動で発信した。

ここでは2019年度の博物館実習全体を振り返りながら本稿の構成について述べる。2019年度7月まで企画展のアイディアに関する討議と学芸員資格取得に必要な知識・技術の習得と訓練に時間を費やした。実習開始直後の4月に資料館のバックヤードで収蔵資料を実見し、本学資料館の学芸員から企画展の概要について説明を受けた。5月中旬までに企画案が決定し、以後実習生は資料班、キャプション班、デザイン班、展示班の４班の役割分掌に基づき、それぞれの立場から本企画展のアイディアを討議することに授業時間を費やした。7月には学芸員資格には不可欠な資料の取り扱い、すなわち考古資料や美術資料の取り扱いや展示方法など、資料館の収蔵資料の実物に触れつつ実技実習を行った。第２クォーターの終わる8月上旬には展示班は展示資料を吟味し、キャプション班は執筆の分担を決定し、デザイン版はポスター・チラシのデザインを全体で共有し、展示班は展示案の第１案を共有し、修正を行なった。8～9月と夏季休暇を挟みはしたが、その間にも実習生は展示キャプションの確認・修正、解説パネルの執筆、資料館職員との展示案の検討などを行なった。夏季休暇明けの第３クォーターの11月18日の開催までは急ピッチで、解説パネルの執筆・作

成、キャプションの執筆・作成、ポスター・チラシの作成、展示案の最終決定を経て、実際の展示作業を行なった。そして、企画展の開催後はミュージアム・ツアーやワークショップなど教育普及活動を行った。6ヶ月という短期間、さらに大半が卒論を抱える4年生であるにもかかわらず、一通りの学芸員業務をこなした実習生には敬意を表したい。なお本稿では、第２章の学生企画展の流れ、第３章の資料調査と展示資料の選定、第４章の展示室の構成と設営、第５章の展示に関する制作物、第６章の教育普及活動の実施の全てに関して岡部が単独で執筆した。そして、末尾の第７章で資料館学芸員として授業に協力した松永が結論も兼ねて全体を振り返り、大学付属の資料館で学生による企画展を行う意義について考察する。

加えて、教員として実習に関わる際に留意した点を3点だけ記したい。第一に金沢大学の博物館実習では学生の能動的な活動を確保するためアクティブ・ラーニング方式を採用してきた。2019年度の実習生は29名であり、前述のようにこれを展示・資料・キャプション・デザインの4班に編成した。毎週の授業では「前週までの振り返り（15分）→議論・作業（120分）→議論・作業の報告（15分）」というサイクルを繰り返し、学生が主体的に学習できるよう、教員は各班のアドバイザーや全体のオブザーバーの立場に徹した。この方式に促されて学生の問題解決能力・調査能力・ディスカッション能力はもとより、コミュニケーション能力までもが飛躍的に向上したと思われる。さらに近年実習生であった大学院生をテーチング・アシスタントとして配置することにより、大学院生自らの経験に基づき実習生に懇切丁寧なアドバイスを行なうことができた。

第二に、班体制と役割分掌を明確化することに意を注いだ。実習生は先述のように29人4班編成である。各人が担当する業務の進捗は各班リーダーにより把握され、各班の議論・作業の進捗は全体リーダーによりマネジメントされる。企画展オープニングまでのタイトなスケジュールが学生の焦りに拍車をかけたことも否めないが、展示までの準備期間を通じて学生の主体性と責任感において著しい成長が見られた。しかし、一方で班別で仕事を分担した反面、縦割りになってしまい、班同士の連携がうまくいかない場面が見られた。このような問題を今後どう改善すべきか教員として考えていきたい。

第三に、テクニカルな点である。金沢大学の博物館実習では、これまでにもSNS（ソーシャル・ネットワーク）やクラウドサービスを活用してきた。何ゆえ俄かづくりの組織が「夏季休業を挟んで」議論・作業を進められたのかを省みるとき、学生が自主的に会議を行っていたことに加え、FacebookやLINEといったソーシャル・ネットワーキングが功を奏しているのは2018年度の実績からも明らかである。Facebookでは学生・学芸員・教員により他者が閲覧できないクローズド・コミュニティーを形成し、そこで自由で活発な議論を行うとともに、議論や作業の結果をアップロードして実習生全員で共有した。また急を要する連絡などではラインが、班内外での横の連携を比較的円滑にすることに一役買った。

金沢大学では博物館実習を受講するには原則として実習以外の博物館関係科目を全て履修していることが条件となっている。そのため、必然的に実習生の大半が4年生になる。実習生は就職活動や教育実習、そして卒業論文という学生生活の大きな山場に直面する。また博物館実習を終えたとしても、学芸員として博物館等に採用される学生は稀である。こうした超人的な忙しさや採用条件の厳しさにもかかわらず、博物館実習を行う意義とは何か。第一には、そして直近には学生の学習効果や人格的成長に留まらず、学生生活を通じて何事かを成し遂げたという達成感にある。第二には、実習を通じて博物館学芸員の業務を一通り経験することにより「ミュージアム・リテラシー」とでも呼ぶべきものを身につけた人材を世に送り出すことにあろう。博物館は一般に資料の収集・

保存・研究の場と捉われがちである。しかし、ミュージアム・リテラシーを身につけた人材を輩出することは、将来、博物館が豊かな生涯教育の場として市民生活に根付いていく一助となるのではないかと考えている。やや自画自賛になるが、本学の博物館実習は、資料館スタッフの献身的なご協力のおかげで、学生企画展を通じて「生きた」実践的博物館実習を提供することができているとも言えよう。

（河合・菅原）

2. 学生企画展の流れ

本章では学生企画展「いろは―多彩な技術から見る色の世界―」のテーマ選択と準備作業、企画展開催後の成果について述べる。その中でも特に、企画展のテーマとコンセプトの決定に至る経緯と、実習生の活動日程を詳述し、展示資料の調査、展示室の構成と展示作業、展示に関する制作物、関連企画等の実施の詳細に関しては、次章以降に譲る。

⑴ 学生企画展に向けた班設置

学生企画展に向けて2019年4月から活動を開始した。まず博物館実習の授業で企画展を行う上での注意事項等を実習生全体で共有した後、2018年度の報告書[7]を参照した上で、実習生の班分けを行った。班については、資料調査を担当する資料班、キャプションの執筆を担当するキャプション班、展示室の構成計画を担当する展示班、キャプション・パネル等の制作物を担当するデザイン班の4班を設置した。今期の企画展に携わった実習生は計29名であり、資料班7名、キャプション班8名、展示班7名、デザイン班7名とし、それぞれの班に班長1名、副班長1名を置いた。以下、上記4班を「基礎班」とする。加えて全体の進行・指示や資料館職員と教員との連絡を代表して行うリーダー1名とサブリーダー2名を基礎班と兼任する形で置いた。7月からは教育普及活動として行うワークショップの計画を担当するワークショップ班、来館者参加型展示である写真展の計画を実施する写真展班を設置し、企画の主要メンバーを各基礎班からそれぞれ1名選出した。また10月にはワークショップ班に10名を追加するとともに、ワークショップ班及び写真展班以外の実習生10名で新たにミュージアム・ツアー班を結成した。以上に挙げた教育普及活動に関する班については、各個人の所属する基礎班と兼任する形で構成した（表1）。

⑵ 学生企画展のテーマとコンセプトの決定に至るまで

学生企画展では、金沢大学資料館の収蔵資料を用いた展示を行うこととなっており、4月から5月にかけて各個人が資料館のVirtual Museum Project[8]の収蔵資料を基に企画を作成し、これらを持ち寄って各班で企画案を作成した。この各班の企画を実習生全体でコンペにかけた。このコンペでは資料班の城内キャンパス時代に注目する「金沢城古昔物語」、展示班の金沢大学前身校の学校風景の再現に注目する「金澤たゐむとらべる～忘れてしまった時間を求めて～」、キャプション班の普段は見ることのできない世界に注目した「覗くもの、映すもの展」、デザイン班の色の技術に注目する「いろは」といったテーマが挙げられた。コンペを経て実習生内で投票を行い、その結果、金沢大学所蔵資料の「色」の技術をテーマに設定し、初めての人に来てもらえるようにという思いを込めて「いろは」をタイトルに決定した。また、「色」をテーマとした華やかな展示で、資料館の外から覗いた人に入りたいと思ってもらえるような企画、親しみやすいテーマの展示で「資料館

に行ったことがない」、「入学時のオリエンテーション以来、資料館に行っていない」という学生を呼び込み、資料館の魅力を知ってもらい、資料館に訪れるはじめ（いろは）としてほしいというデザイン班提案のコンセプトを踏襲した。このコンセプトのもと、5月には具体的な色を赤色、青色、金色の３色の資料を展示することとした。この選定理由としてはそれぞれの色の対象となる資料が比較的多く、多様な技術を取り扱うことができると考えたからである。サブタイトルについては各班から提案を持ち寄り、6月20日に実習生全体が参加するコンペを経た上で「―多彩な技術から見る色の世界―」に決定した。

⑶ 各班の準備活動及び企画展の成果

今回の博物館実習履修者は29名と比較的人数が多く、作業は各班に分かれて行い、必要に応じて他班と連携して活動を行った（表2・3）。このため、情報共有を正確に行う必要があり、その手段として主に実習授業内の冒頭と終わりに各班の進捗状況や今後の予定について共有した。加えて、実習授業外の連絡についてはSNSを利用した連絡や、Webクラウドサービスを使用した資料等の情報共有を行い円滑な進行を試みた他、各班が自主的に会議等を行い作業の進捗を共有した。

展示の進行計画については、全体のリーダーとサブリーダーの計３名で随時リーダー会を開催し、教員が立てた年間計画を受けて、1週間あたりの全体の動きを決定し、タイムスケジュールを立てた他、実習授業外の際の実習生の日程調整を行った。4月の第１回リーダー会では今後の方針の決定、5月の第2回リーダー会では前期の予定調整、８月の第3回リーダー会では後期の予定調整、10月以降の第４～７回リーダー会ではより詳細な展示日程の調整を行った。

タイトル・テーマを決定した後、前期の期間では資料班は展示資料の暫定リストを作成し、資料の詳細な調査を行った。収蔵庫で実際に資料の確認を行ったのち、展示資料の選定、目玉となる展示資料の決定、追加資料の検討を経て10月２日に最終的な展示リストを決定した。ただし、展示作業中には展示スペースの関係もあり、資料を数点追加することとなった。この間にキャプション内容の作成、解説パネル内容の作成を資料班とキャプション班が同時進行で行った。同じく前期の５月からデザイン班はビジュアルイメージの決定及びポスター・チラシの作成に取り掛かり、10月24日に入稿した。展示班は展示計画の作成を進め、什器サイズ計測や資料の状況確認、光源・設計位置確認、天井の高さや柱の太さの計測、資料館職員からのアドバイスを受けて11月7日に展示の配置案を最終決定した。

後期からは展示の際のパネルやキャプションなどの制作物が中心に作成され、11月7日～8日、11日～14日の展示作業を経て、2019年11月18日の開催を無事に迎えた。また、ワークショップ準備や写真展概要の決定を展示準備作業と同時並行で行った。

開催以降ミュージアム・ツアー班、ワークショップ班、写真展班を中心にそれぞれ教育普及活動を主催した。ミュージアム・ツアーについては、展示作業が終了した11月22日より概要の決定を行った。会期中の来館者はのべ1178名で、2020年1月28日に展覧会を終え、同月30日に撤収作業及び最終報告書の作成を行った。

表1. 班割りと学生の内訳

班	学類	コース	学年	役職	各主要メンバー
資料	人文	日本史	4年	班長	
	人文	フィールド文化	3年		
	人文	フィールド文化	3年		
	人文	フィールド文化	3年		ワークショップ
	人文	フィールド文化	4年		
	人文	フィールド文化	4年		写真展
	人文	日本史	4年	リーダー	
キャプション	人文	東洋史	4年	班長	
	人文	フィールド文化	4年	副班長	
	人文	フィールド文化	4年		写真展
	人文	フィールド文化	4年		
	人文	日本史	4年		
	人文	日本史	4年		ワークショップ
	人文	日本語学日本文学	4年		
	人文	日本語学日本文学	4年		
展示	人文	日本史	4年	班長	写真展
	人文	社会学	4年		
	人文	フィールド文化	4年		
	人文	フィールド文化	4年	サブリーダー	ワークショップ
	人文	日本語学日本文学	4年		
	地域創造	環境共生	4年		
	人文	西洋史	4年		
デザイン	人文	フィールド文化	4年	班長	
	人文	フィールド文化	3年		写真展
	人文	フィールド文化	4年	サブリーダー	
	人文	フィールド文化	4年		
	人文	フィールド文化	4年		ワークショップ
	人文	日本語学日本文学	4年		
	人文	フィールド文化	3年		

表2. 各基礎班の活動日程

月	日付	資料班	キャプション班	デザイン班	展示班
4	11	各種役職決め			
	18	企画案についての話合い			
	25	バックヤード見学 企画案についての話合い			
5	9	企画案発表(全体)			
	16	企画案決定			
	17				
	23	全体：構成の思案（タイトル・テーマ・暫定リストの決定）			
		資料の詳細調査	リスト外資料の調査	ビジュアルに関するイメージ構想	リスト外資料の調査
	30	全体への暫定リストの紹介 資料の絞り込み		ビジュアルイメージ提案	
6		全体：サブタイトル・ワークショップ案			
	6	収蔵庫確認		ポスター案作成 使用色案	
	13	資料リストからの資料の選定 追加資料の選定 目玉資料の決定 技法調査（6/13～19）	資料リストの作成	ポスター案話し合い 使用色決定	展示計画の作成
		全体：サブタイトルの決定			
	20	全体への資料の技法紹介	資料リストの情報を補足 解説パネルに関する資料班への相談 パネル設置に関する展示班への共有	ポスター案発表 タイトルデザイン案作成 企画展紹介文推敲	
	27	解説パネルの試案 ポスター裏面の資料解説作成	キャプションの校正と修正	ポスター、タイトルデザイン決定	展示什器の種類とサイズの確認
7	4				赤展示内容決定
	11			チラシ裏面案作成	青展示内容決定
	18			チラシ裏デザイン決定 資料写真撮影	金・青展示内容決定
	25			ポスター・チラシ仮完成	展示第1案決定
8	1	展示資料の吟味	キャプションの記載要綱の決定 執筆の分担	ポスター・チラシの全体共有	展示案の全体共有・修正
夏季休業		キャプションの確認と修正（9/18～10/2） 追加資料の選定（9/25～10/2）	あいさつパネル執筆（8/8～10/2）		資料館職員との展示案検討 光源等資料館設備の確認 資料館展示室の測定
10	3	キャプションの確認 解説パネルの枚数と内容の決定 解説パネル作成（10/3～16）	あいさつパネル校正と修正	キャプション・パネルデザイン構想	展示案の詳細作成
	10	解説パネル作成	キャプションの英訳の確認と修正 キャプション執筆（10/10～17）	キャプション・パネルデザイン構想 作成物の分担 ポスター・チラシ完成	展示案の詳細作成
	17	解説パネル内容確認 解説パネル修正、提出（10/17～20）	キャプションのフォーマット統一 キャプション第1稿の提出 追加資料のキャプション執筆（10/17～24）	ポスター・チラシ校閲・修正 キャプション・パネルデザイン決定	展示案の詳細作成
	18	収蔵庫確認		キャプション・パネル作成 バナーデザイン案作成 （10/18～23）	追加資料の状態確認
	24	解説パネル確認、修正 追加資料のキャプション作成 収蔵庫確認 解説パネルの写真調達（10/28～11/7）	解説パネル校正 キャプション校正と修正	ポスター・チラシ入稿 バナーデザイン決定 キャプション・パネル校正・修正 （10/25～11/6）	大学図書館所蔵資料の状態確認
	29		あいさつパネル校正と修正		
	31				
11	5	解説パネルの最終調整（11/5～7）			
	7		キャプション校正と修正 最終稿提出、微調整 （11/7～12）	ポスター・チラシ発想 あいさつ・章パネル印刷 キャプション・解説パネル修正 （11/7～12）	展示案の最終決定
	11				資料館展示室で什器の設置
	12			キャプション・解説パネル修正 あいさつ・解説・写真パネル印刷	資料の搬入・配置・調整
	13			解説・写真パネル貼付作業 キャプション修正	資料の搬入・配置・調整 パネル設置
	14	展示リスト作成 ミュージアムツアー概要決め		キャプション最終修正・印刷 御解説パネル修正・印刷 順路看板作成・印刷 ポスターA2判印刷 キャプション・解説パネル貼付作業 展示作業	パネル設置、資料位置の調整 資料位置の微調整、什器清掃
	15			解説パネル貼付作業	ライティング調整
	18	企画展開催			
	19			解説パネル1点修正・貼付作業	
	21 28	報告書作成			

月	日付	資料班	キャプション班	デザイン班	展示班
12	9	ミュージアム・ツアー			
	10	ミュージアム・ツアー			
	11	ミュージアム・ツアー			
	12	ミュージアム・ツアー			
	13	ミュージアム・ツアー			
1	30	撤収作業 報告書作成			

表3. 各教育普及活動及び企画班の活動日程

月	日付	リーダー班	ミュージアム・ツアー班	ワークショップ班	写真展班
4	11	第1回リーダー会 （今後の方針の検討、 Google Drive作成）			
	18				
	25				
5	9				
	16				
	17	第2回リーダー会 （前期予定調整）			
	23				
	30				
6	6				
	13				写真の構想
	27			ワークショップ案の構想	写真展開催有無の議論
7	11	企画書案の作成		ワークショップ内容の吟味	写真展開催の決定
	18			ワークショップ内容の決定 班結成	班結成
	25			タイムスケジュールの構想	概要の構想（～7/31）
8	1	第3回リーダー会 （後期予定調整）		企画案の残対共有、意見交換	概要の検討と意見交換
夏季休業				実験（8/19）	
10	3			実験結果の全体共有	
	10	第4回リーダー会 （ミュージアム・ツアーと各企画の調整） 企画展告知メール案の作成		実験（10/9） 実験結果の全体共有 第1回の開催日時と場所の決定	告知メール・ポスター文面作成 募集・投票期間の確定 展示計画の相談
	17			第2回の開催日時と場所を決定	展示方法・印刷方法の検討
	18				投票箱等の作成（10月中）
	24	企画書確定版の作成			展示方法の検討
	31	第5回リーダー会 （展示日程調整）			
11	5	第6回リーダー会 （展示日程調整）			
	7				募集メール等の調整 投票方法決定 写真の印刷確定
	8				写真の印刷・展示準備
	13				投票用紙の作成 キャプションの印刷・準備
	14	第7回リーダー会 （授業計画と展示日程調整）		タイムスケジュールとシナリオの作成 用意するものを決定	写真の展示作業 最終確認
	18				投票の集計・用紙の補充 （～12月16日）
	21	報告書作成	メンバーと日程の決定 告知メール作成 シナリオの作成・エピソード収集	シナリオの改良 開催場所の下見 告知メールの作成	報告書作成
	28	報告書作成	シナリオ読み合わせ	告知メールの作成 細部の検討 パワーポイントとレジュメの作成	
12	2			博物館関連の授業での開催告知	
	5		資料館でリハーサル	リハーサル	報告書作成
	9				
	10			ワークショップ1回目の開催	
	16				最優秀作品の決定 投票スペースの撤去
1	9				最優秀作品の展示
	15				最優秀作品展示スペースの微調整
	22			ワークショップ2回目の開催	
	30	撤収作業 報告書作成	報告書作成		

⑷ 評価

学生企画展の流れの評価として、計画・進行、情報共有、記録関連の観点から述べていく。

まず計画・進行について、全体を通して、企画内容や予定を詳細に決めることで、事前に余裕をもたせた予定を立てることができた。一方で、修正やトラブルにより日程がずれるということもあったため、予期せぬトラブルを想定し、早め早めに時間設定をする点や「かもしれない計画」を立てることが極めて重要であった。加えて、各班がそれぞれの企画展準備の動きを認識するために、前年度の報告書を参考に計画を立てる機会があると良い。実際の展示作業や作成作業について、班によって関わり方に差異が生じており、各自の所属する班の作業以外は無関係となってしまう可能性がある。実際の企画展作業より前に実務的な作業について全員が知る機会があると良いと考える。

次に情報共有について、班内での情報共有は授業中の話し合いやSNSを用いた連絡で共有ができた一方で、縦割りが生じてしまい、他の班や教員、資料館職員とのスケジュール共有や意思疎通、連携が不十分であった。グループ内だけでなく実習生全体、教員、資料館職員でよく話し合っておくべきであった。加えて、前年度の引継ぎ事項の確認が遅く、具体的な展示準備に入った際に必要以上に作業量が増えてしまった。特に具体的な展示作業に入る前までには、前年度の報告書を確認する必要があった。中には例年のように繰り返し指摘されている注意事項もあり、引き継ぎの重要性は非常に高い。

記録物について、各回の議事録や日程記録など文章記録は十分できた。特に各班が議事録を詳細に記録し全体にWebクラウドサービスを用いて全体に共有することで、他班の活動についても可視化できる点が有効であった。一方で、他班の活動記録の確認は任意であったため、全員が資料を認識するには不十分であった。重要な記録については、全体の報告の場での共有が重要である。

（岡部）

3. 資料調査と展示資料の選定について

本章では、企画展の資料概要を述べたのち、資料調査と展示資料選定に関して詳述する。

⑴ 展示資料の概観

本企画展では金沢大学資料館、金沢大学附属図書館、金沢大学埋蔵文化財調査センターが所蔵する資料について、資料を彩る「色」に着目した企画展となっている。展示の対象となる資料として金沢や金沢大学にゆかりのある資料を用い、資料の色に利用されている技術や原材料などを紹介する点を重視した。これを受けて、金沢にゆかりのある主な展示資料としては暁烏コレクション陶磁器類、「経武館」扁額、物理実験機器、授業用参考掛図を選定した他、それぞれの資料について、「なぜその色に見えるのか」「色はどのようにして生まれるのか」という問いかけへのヒントを提示できる資料を選別した。

⑵ 展示資料選定・資料調査

企画案の時点で示されていた資料リストを元に、資料班内で企画展のコンセプトに合う資料を、資料館のVirtual Museum Projectと学術資料データベースから選出した。資料班で選出された資料について３色の色ごとに担当を決め、基本情報（名称・資料番号・年代・寸法など）を調査し、暫

定資料リストの勉強会を実習時間内で開くことで資料の情報を実習生全体に共有した。また、暫定資料リストを作成する際には、３色の展示資料が同じ点数になるように展示資料候補を絞り込んだ。

６月初旬に資料館に行き、実際に収蔵庫で絞り込んだ資料を確認することで、当該資料が展示に向いているか検討した。この検討を行うことで、赤の資料として暫定資料リストに選定していた金沢大学資料館所蔵、暁烏陶磁器コレクションの「京焼梅花文煎薬器」が実際には赤の資料として適切ではない点や、同じく金沢大学資料館所蔵の「フェヒナー氏電気計」が金の資料として不適であり、他にも同様の資料で好例があるといった点、同じく金沢大学資料館所蔵、西村コレクションの青銅製人形が来歴不明であり、かつ記載されているヒエログリフ（象形文字）の意味が通らず贋作である可能性があるため、展示資料としてふさわしくないという点、金沢大学埋蔵文化財調査センター所蔵の金沢醫科大学時代の病院食器が多数出土しており、その中から絞り込む必要性がある点など、資料リストの再編の必要性を認識した。これを受けて、追加資料を加えた展示資料を選定した。

同月に本企画展のコンセプトである「資料館の外から覗いた人に入りたいと思ってもらえるような企画」という点を展示資料に反映させるため、資料リストを元に赤色からは「九谷赤徳利」、青色からは「模造七宝焼」、金色からは「日光顕微鏡」というように、それぞれ1つずつ目玉資料を選定した。これらの資料について、それぞれが明らかに赤・青・金色であることが遠目で見てもわかるという点や、それぞれの技法について解説すべき魅力を持っているという点から選定した。

上記の経緯を経て、11月に展示資料の最終的な資料リストが完成した（表4）。この間、資料選定に加え、暫定資料リストから各色に関する技法の調査を行った。６月には実習時間内で勉強会を設け、実習生全体で技法について確認を行い、それらの技法の中から解説パネルで紹介すべき技法を選定した。赤の展示資料は絵と焼き物、青の展示資料は同じく焼き物と青銅、金色の展示資料は金箔や物理実験器具、蒔絵漆碗が主な展示資料となっている。このため、赤色では「赤の認識について」、「版画の技法」、「上絵付の赤の出し方」、赤色と青色では「陶器の制作フローチャート」、青色では「青銅の色味」、「青焼きの技法」、「染付・七宝焼の青色の出し方」、金色では「扁額の説明と金箔の使用」、「光の反射」、「蒔絵の技法」に注目した解説を行うこととし、パネルの枚数と内容の決定は10月中に行った。パネル作成に関する詳細は第5章「展示に関する制作物について」の第2節「パネルの構成と作成」に譲る。

⑶ 資料の借用

本企画展では金沢大学資料館の他に、金沢大学埋蔵文化財調査センターと金沢大学附属図書館の資料を借用した。金沢大学埋蔵文化財調査センターの資料については、金沢大学埋蔵文化財調査センター職員の協力のもと、資料調査と選定を行い、「蒔絵漆椀蓋」計2点、「室町遺跡出土近代青磁碗」計1点、「室町遺跡出土病院食器」計4点を借用した。また金沢大学図書館の資料については「歴史科教授用参考掛図第十輯天海画像」、「歴史科教授用参考掛図第十輯山崎闇斎画像」を借用した。

表4. 展示資料リスト

番号	資料名	資料番号・請求番号	寸法(縦/高さ×横/直径 cm)	コレクションなど
	赤			
1	大樋焼 飴釉 角(つの)のある花器	34	70.0×20.0	美術資料
2	歴史科教授用参考掛図　第十輯　天海画像	は-02 ・K1503-06	61.9×46.3	図書館蔵
3	九谷美人絵皿	22	4.8×19.8	暁鳥陶磁器コレクション
4	伊万里焼草花カルタ文大皿	225	直径40.0cm	暁鳥陶磁器コレクション
5	女学世界絵葉書	910-00-123-255	14.0×9.0	梅田家資料
6	九谷赤徳利	17	8.5×15.5	暁鳥陶磁器コレクション
7	闘牛	19	100.0×80.0	絵画（油彩画）
8	旗（南下軍）	000－01－100－0　70	約2m×約50㎝	四校同窓会旧蔵資料
	赤資料小計　8			
	青			
1	宮島焼藍釉花立	329	56.0×13.0	暁鳥陶磁器コレクション
2	瀬戸焼草花文徳利	67	26.0×9.5	暁鳥陶磁器コレクション
3	瀬戸焼染付カルタ文壺	69	22.0×16.5	暁鳥陶磁器コレクション
4	模造七宝焼壺	751	13.0×9.5	暁鳥陶磁器コレクション
5	ランプ(96JN57)	58	4.0×5.1×10.3(HDW)	西村コレクション
6	宝町遺跡出土近代青磁碗	KTB0916・18052 PZ285	口径11.6cm×器高5.7cm×底径4.1cm	金沢大学埋蔵文化財調査センター
7	宝町遺跡出土病院食器　計4点	杯：KTB98・4971 M8L1a 皿： KTB98.16767 X16 PZ24 蓋 ：KTB98.16768 X16 PZ24 蓋物身：KTB98.16769 X16 PZ24	杯：口径4.8cm×器高4.8cm×底径3.7cm 皿：口径18.0cm×器高2.9cm×底径10.1cm 蓋：外径13.5cm×器高1.95cm×かえり径10.6cm 蓋物身：口径12.3cm×器高8.5cm×底径9.4cm	金沢大学埋蔵文化財調査センター
8	伊万里焼染付碗	498	5.5×15.5	暁鳥陶磁器コレクション
9	草花文広口壺	680	19.0×15.0	暁鳥陶磁器コレクション
10	石川県立金沢病院新築図	仮4（バーチャルミュージアム）	63.3×78.7	
11	歴史科教授用参考掛図　第十輯　山崎闇斎画像	は-02・K1503-08	62.3×46.4	図書館蔵
	青資料小計　14			
	金			
1	蒔絵漆椀蓋　計2点	蓋1：KTB0109-160 PX1308 蓋2：KTB0109-272 PX1308	蓋1：口径11.4cm×器高2.9cm、 蓋2：残存長9.8cm×残存幅5.6cm×残存高2.3cm	金沢大学埋蔵文化財調査センター
2 - 1	マグデブルグ半球（黒）	420-01-002-2	14.5×11.5	
2 - 2	マグデブルグ半球（金）	420-01-002-2	未測定	
3	サイレン	420-01-002-8	34.0×8.5	
4	サイレン	420-01-002-9	28.0×14.0	
5	サイレン模型	420-01-002-10	31.0×10.0	
6	日光顕微鏡	420-01-002-18	36.5×4.0	
7	経武館	13	140×265	
	金資料小計　9			
	資料総計　３１			

⑷ 評価

色の技法について多角的に見られるように、様々な種類の展示資料を選定できた他、目玉展示を決めたことで企画のコンセプトを分かりやすく提示できた。また、これまでの企画展と比較して、資料の種類が多いのみならず、展示に目新しさが出せた他、赤の展示資料である「旗（南下軍）」や美術資料など常設展で普段展示しないものを選定したことで、常設展との差別化ができたと考える。一方で、追加資料の選定が遅くなり、資料調査の時間が十分にとれなかった資料もある。展示計画に関して展示班から早めに追加資料の必要性を相談するなど、より綿密な連携が必要であった。加えて、資料と什器のサイズ感を考える必要があり、メジャーなどを使用し、実際に資料のおおよその大きさを目で見える形で実習生全体に共有するべきであった。

（岡部）

4. 展示室の構成と設営について

本章では、展示室の構成と設営について述べる。

展示室の構成を決定するまでに、展示イメージ案の作成、什器のサイズ計測、展示配置案の提案

と修正、光源・設備位置、展示室内の天井・柱の計測といった展示計画を行い、2019年11月7日よりパネル・キャプションの印刷、展示室での什器の設置、資料の搬入・配置・調整、パネルの設置、資料位置の微調整、什器清掃、ライティング調整という手順で展示を行った。本章の設営の節においては特に2019年11月の具体的な展示作業部分について述べることとする。

⑴ 展示室の構成内容

展示室は、展示のテーマの色ごとに分けられ、導入から順に赤色、青色、金色と大きく分けた。3色の配置順の決定要因としては、赤色と青色の章は両者ともに焼き物の解説パネルを設置することから、この両者の章を隣接させる必要があった点、古来より使用されている赤色がはじめに設置するにふさわしい点が挙げられる。また、以上の３つの章の冒頭部分には３色全ての目玉展示を設けるとともに、来館者参加型の展示である「写真展」の展示スペースを最終部分に設けた。順路は展示室の出入り口の位置と常設展との位置関係を考慮して反時計回りとし、一方通行の順路とした。企画展を訪れた来館者がそのまま常設展へと足を運んでもらえるような順路配置となっている(図1)。

目玉展示の展示スペースは、資料館入り口の正面に配置し、本企画展の導入とした。この位置に目玉となる展示資料を配置した意図には、本企画展のコンセプトである「資料館の外から覗いた人に入りたいと思ってもらえるような企画」という思いが込められている。これらの目玉展示を黒い背景の前に設置することで、資料館の外からでも目玉展示に目が行くように工夫した他、青色の目玉展示である「模造七宝焼」については、金色と赤色に比べて比較的黒い背景と一体化してしまうため、下に白色の調湿紙を敷いた。また、金色の目玉展示である「日光顕微鏡」はそのまま展示すると、遠くから見た際に展示物を判別することが困難である。そこで、資料全体が遠くから見えるように、資料を斜めに置く工夫をした。

赤色のセクションは「第一章赤」とし、九谷焼をはじめとする焼き物、絵葉書や絵画を展示した。金沢大学附属図書館から借用した「歴史科教授用参考掛図第十輯天海画像」は保存の観点から照明を暗くする必要があったため、資料を展示した付近の壁に、資料を拡大したパネルを2次資料として設置した。展示計画を練っていく上で、展示資料リスト決定後に展示スペースの空きが見られた。これを受けて、平面的な印象になることを避けるために、急遽「旗（南下軍)」を展示することを決定した。この資料は資料館のVirtual Museum Projectには登録されておらず、資料館職員との情報交換を経て追加した資料である。また、解説パネルは壁に取り付ける場合、全体を通して床面から100㎝で統一した。

青色のセクションは「第二章青」とし、「模造七宝焼」をはじめとする焼き物の他、青銅のランプ、青焼などを展示した。金沢大学附属図書館から借用した「歴史科教授用参考掛図第十輯山崎闇斎画像」について、赤色の資料の「歴史科教授用参考掛図第十輯天海画像」と同様に保存の観点から照明を50lx（ルクス）に設定し、２次資料として資料を拡大したパネルを設置した。また、青銅のランプは展示ケースに対し、比較的小さな展示資料であったため、アクリル台の上に置くことで高さを出し、見やすい展示方法となるように工夫した。

金色のセクションは「第三章金」とし、金箔を使用した加賀藩校扁額の他、四高物理実験機器などを展示した。特に加賀藩校扁額は展示ケースに入れずに展示を行うため、来館者が手で触れないように、周囲にロープで囲いを設けるとともに、注意喚起の看板を設置した。

写真展のセクションでは、募集した写真を張り出すパーテーションと投票箱を設置した。募集し

た写真については、印刷した写真に加えてiPadを設置し、印刷した写真と同じものを画面で見られるように設定した。写真展については、第6章3節「写真展」にて詳述する。

来館者への観覧の補助として、展示室入り口に企画展開催の旨を伝える看板を設置した他、展示室入り口に順路看板を設置するとともに、写真展などの誘導看板を設けた。

⑵ 展示室の設営

展示室の設営は、実習の授業時間及び11月7日～8日、11日～14日の６日間で行った。授業時間以外の設営作業については、原則金沢大学における２～４限の時間帯に行い、展示班と資料班を中心に5名を目安に実習生のシフトを組み、作業に当たった。加えて、キャプション・パネルの作成もキャプション班とデザイン班を中心に並行して行い、印刷作業が終了次第展示作業に合流した。資料の展示について、展示する什器のスペースの問題から金色の資料である「マグデブルグ半球」を追加し、青色の資料においても病院食器の資料を追加するなど変更を行った。また、「蒔絵漆椀蓋」は比較的良好な状態で発見されてはいるものの、非常にもろく、清潔な手で触れるなど注意する必要があった。なお、本資料については埋蔵文化財調査センターの松永先生に展示を依頼した。展示作業最終日の11月14日には什器の調整と掃除、ライティング作業を行い、点検として写真記録を撮り全体で共有した。

⑶ 評価

展示の構成内容について、報告されている資料の数値が実際に並べると大きさが違うということや、近くで見られるように展示した方がよいと判断した資料があった。このため、大きさを事前に確認したり、資料の前に置いたパネルが邪魔にならないよう配置したりする必要性があった。また、展示計画では展示資料に焦点が当てられており、キャプションの配置についても、同様に厳密な計

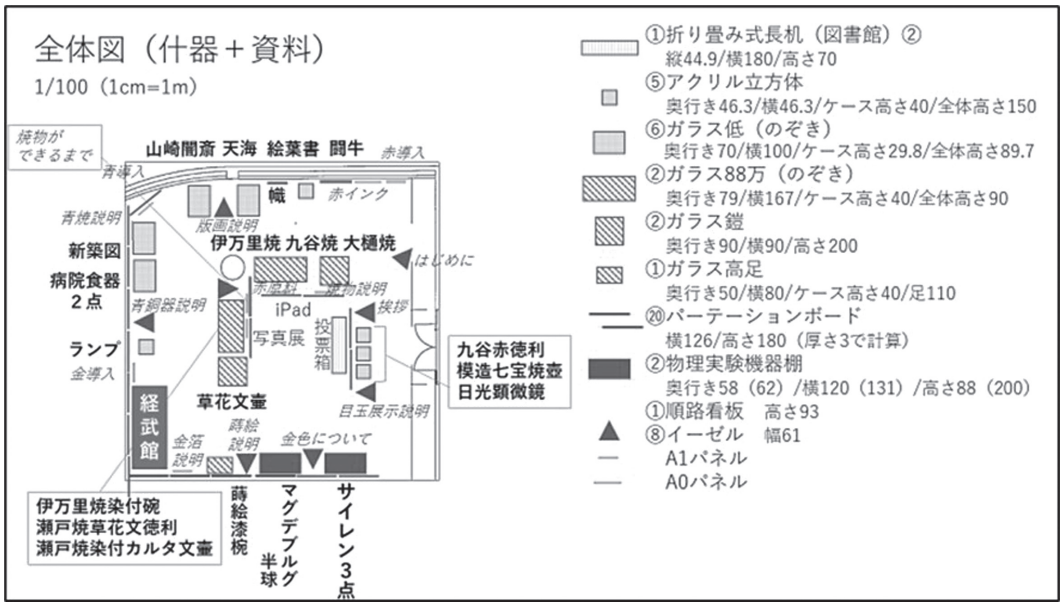

図1. 展示室の構成

画をした方がより円滑な作業となったであろうと考える。その際、どのような解説パネルが実際に作られているのか把握するために、他班との話し合いを早い段階で行うなど、連携を重視する必要があった。加えて、解説パネルを詳しく読まない来館者がいることも考慮する必要があった。特に今回のコンセプトは普段博物館を訪れない人を対象としているため、軽く見て回るだけでもある程度コンセプトが分かるように工夫すべきである。

設営について、展示作業時に印刷した展示配置案を資料館展示室に置き、全員で共有した他、作業が終わるごとに進捗状況や変更点の共有をすることで、円滑な展示作業ができた。展示作業中に計画を変更することが多々あるため、目で見える形での情報の共有は非常に重要である。また、展示作業は基礎班の合同作業で行ったため、展示配置案の変更の際も、他班員と話し合って決めることができた。一方で、展示作業の記録が少なかったことが反省点として挙げられる。撤収作業時に資料の元の保管方法が分らず、作業の中断が多々見られたため、展示作業時にそれぞれの状態について作業段階ごとに写真を撮っておくなど、作業についても写真記録などを取るべきであった。

（岡部）

5. 展示に関する制作物について

本章では企画展に関連する制作物について述べる。本企画展での制作物は主に展示資料の基礎的な情報及び資料解説を記すキャプション、企画展の趣旨や各章の趣旨、色の技術の解説を提示するパネル、企画展の広報としてのポスター・チラシとなっている。加えて第4節「その他制作物」において、以上に挙げた制作物以外についても触れることとする。

⑴ キャプションの構成と作成

キャプションは上記の通り展示資料の基礎的な情報及び資料解説を示す目的のために作成した。1つの展示資料につき1つのキャプションを作成することとし、最終的に計27点のキャプションを作成した。キャプションに記載する内容としては、原則として資料番号、資料名（日本語/英語）、年代、制作地、所蔵場所、解説文を含めた。

資料班の調査した資料の情報と資料館・図書館のデータベースをもとに、キャプション班が作品ごとのキャプションを執筆し、デザイン班及び資料館職員と教員が校正を行った。キャプションのデザイン・作成はデザイン班が行った。

⑵ パネルの構成と作成

パネルの種類は大きく分けて「挨拶パネル」、「章立てパネル」、「解説パネル」、「資料パネル」の4種類に分けられる。挨拶パネルは「実習生・館長あいさつ」、「はじめに・注意事項」、「おわりに」の計3枚（A0/A1）、章立てパネル（図2）は「第一章赤」、「第二章青」、「第三章金」の計3枚（A1）、解説パネル（図3）は「目玉展示」、「赤の顔料」、「赤の原料」、「赤の焼き物」、「版画の技法」、「産地ごとの焼き物」、「焼き物ができるまで」、「青の原料」、「青焼の技法」、「青銅の色味」、「経武館」、「色が見える仕組み」、「蒔絵技法」の計13枚（A0/A1）、資料パネルは「歴史科教授用参考掛図第十輯天海画像拡大図」、「歴史科教授用参考掛図第十輯山崎闇斎画像拡大図」の計2枚（A1）で構成した。

「挨拶パネル」と「章立てパネル」はキャプション班が執筆し、デザイン班及び資料館職員と教員が校正を行った。「解説パネル」と「資料パネル」は資料班が執筆し、デザイン班及び資料館職

員と教員が校正を行った。以上に挙げた全てのパネルのデザイン・作成はデザイン班が行った。

⑶ ポスター・チラシの構成と作成

企画展の広報の印刷物としてポスター・チラシの2種類を作成した。ポスター（A2、縦、カラー）は片面とし、タイトル、サブタイトル、資料写真、場所、開催期間、休館日、協力機関、金沢大学ロゴで構成した（図4）。チラシは両面とし、チラシ表（A4、縦、カラー）はポスターと同じ内容とデザインを採用した。チラシ裏（A4、縦、カラー）は企画展紹介、資料写真と紹介、アクセスマップ、写真展開催趣旨、ワークショップ開催趣旨と日程、ミュージアム・ツアーの日程で構成した（図5）。

ポスター・チラシの作成にあたって、作成する準備として、参照できるポスターを検索し、班内でイメージを共有した上で、各自のレイアウト案から班内でコンペを行った。このコンペを経て決定したポスター案をIllustratorで作成した。これと並行してチラシの裏に入れる情報を整理し、企画展の紹介文の作成や展示タイトルのタイポグラフィ作成、写真撮影などを行った。資料の説明文は資料班が執筆し、デザイン班が文字数を調整した。資料写真は資料館地下準備室にて撮影し、フォトショップで加工・トリミングを行ったほか、一部はVirtual Museum Projectの画像を使用した。後期には写真展やミュージアム・ツアー、ワークショップの詳細が決定したことを受け、情報を加えアウトライン化をしたのちに資料館に入稿した。入稿後、ポスターは50部発注し、学内等に掲示するとともに、学外へ25部送付した。チラシは500部発注し、学内等に掲載・配付するとともに、学外へ250部送付した。

⑷ その他制作物

その他の展示に関する制作物としては、案内看板、告知メール、資料館ＨＰ用告知バナー、企画書の作成が挙げられる。

案内看板として、写真展案内（A3）を１枚作成した他、展示順路を示す順路看板（A4）と写真展位置を示す順路看板（不定形）の計２枚の順路看板を作成した。以上に挙げた計３枚の看板はいずれもパネルと同様のデザインを採用した。

告知メールは金沢大学の学内メールであるアカンサスメールから学内に向けて送付する告知メールを指す。このアカンサスメールとして、企画展開催に関する告知メール、ミュージアム・ツアーの告知メール、ワークショップの告知メール、写真展の告知メールを準備・送付した。それぞれのメールにはチラシ（PDF）を添付するとともに、ワークショップに関しては人間社会４号館１階造形講義室で行ったため、構内地図を添付した。企画展開催に関するメールはリーダー班が担当し、その他ワークショップやミュージアム・ツアーなどについては該当班の担当者が作成した。

資料館ＨＰ用告知バナーはタイトル・サブタイトルで構成した。作成はデザイン班が担当し、提案した４つの原案の中から実習生の投票によって選ばれた案を元に決定版を作成した（図6）。これを全体に共有し、資料館へデータを送付した。

企画書はリーダー班が作成し、企画名称、会期、時間、展示場所、主催、協力機関、展示コンセプトを記載するとともに、展示資料リストと展示計画を添付した。

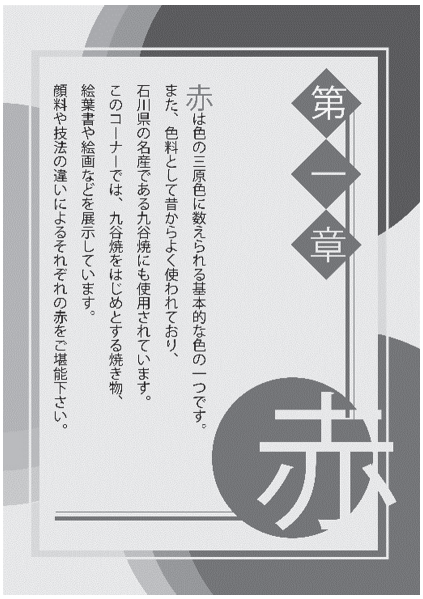

図2．章立てパネル

図3．解説パネル

図4．ポスター・チラシの表面

図5．チラシの裏面

図6．資料館HP用バナー

⑸ 評価

キャプション・パネルの構成について、早い段階でパネル等のデザイン案が完成していたため、何度も修正をかけることで、洗練されたパネルデザインを作成することができた。また、章ごとに同じデザインのパネルの色の部分を変えることで、パネル全体に統一性を持たせながらも、本企画点のテーマである「色」にふさわしいデザインとなった。反省点としては、全体のパネル・キャプションの統一感を出すために、フォーマットの確認や文字数の決定をしておくべきであった。また、パネルに参考文献を載せる必要はないが、写真の出典元は必要であるため、使用許可の申請またはクリエイティブコモンズや独自資料の利用などを検討する必要がある。キャプション・パネルの作成について、執筆と作成が別々の班で行われる他、教員や資料館職員との校正作業のやりとりが行われるため、それぞれのコミュニケーションが非常に重要である。内容や変更点の確認、スケジュールの共有など綿密に行う必要がある他、個人が担当しているキャプション・パネル以外のものについても各個人が全体を把握する必要がある。また、パネル・キャプションの担当班の執筆後、デザイン班が校正を行った上で、Illustrator上で作成した後に教員と資料館職員に校正を依頼したため、大幅な修正の際にはIllustrator上での作業に時間がかかり非効率的であった。文章を執筆した段階で一度資料館に確認してもらうべきである他、事前にIllustratorの操作方法を学ぶ機会があるとよい。加えて、何度も修正が入るため、データの管理方法としてWebクラウドサービスにアップロードする際には、フォルダ名に日付を記載するべきであった。

ポスター・チラシについて、前期にポスターの作成を開始したことにより、余裕を持って作成することができた。ポスターの掲載については、事前に掲載場所を確認する他、どこに何枚送付・掲載したかをきちんと把握するべきである。

（岡部）

6. 教育普及活動等の実施について

本章では教育普及活動として実施したミュージアム・ツアーとワークショップ及び来館者参加型展示である写真展について述べる。

⑴ ミュージアム・ツアー

ミュージアム・ツアーは2019年12月９日～13日の５日間で行い、実施時間は原則12時15分～12時45分とした。資料に興味を持ってもらえるように、月曜は「赤の回その1」、火曜は「金の回」、水曜は「青の回その1」、木曜は「赤の回その2」、金曜は「青の回その2」というように、様々な資料を取り扱えるようにした（表5）。資料班を中心に各日２名が担当し、担当者ごとに本番で用いるシナリオを作成した。内容としては、資料自体の概説に加え、キャプションに載っていない情報（資料選定の理由、解説パネル作成時や展示中のエピソード、苦労話など）を盛り込むことで、ミュージアム・ツアーでのみ得られるような知識を提供した。リハーサルの前週に読み合わせを行い、教員から助言を得て修正した。教員や資料館職員からは原稿を見ない、ボイスレコーダーで練習するなどの助言も得た。本番当日には、金沢大学附属図書館の図書館司書の方に依頼し、館内放送でミュージアム・ツアー開催の放送を行ったのち、ミュージアム・ツアーを実施した。ミュージアム・ツアーの本番が終了次第、振り返り資料（担当者・参加人数・よかった点・反省点含む）を作成し、Webクラウドサービスにアップロードすることで全体への共有と引き継ぎとした。ミュージアム・

ツアーには5日間で計69名が参加した（図7・8）。

表5. ミュージアム・ツアースケジュール

日程	タイトル	内容	担当	参加人数（人）
12月9日（月）	赤の回その1	赤の焼物	資料班1名 デザイン班1名	9
12月10日（火）	金の回	金の資料	資料班1名 展示班1名	18
12月11日（水）	青の回その1	青の焼物以外	キャプション班1名 デザイン班1名	16
12月12日（木）	赤の回その2	赤の焼物以外	資料班1名 展示班1名	12
12月13日（金）	青の回その2	青の焼物	資料班1名 展示班1名	14

図7. ミュージアム・ツアー
「青の回その1」の様子

図8. ミュージアム・ツアー
「青の回その2」の様子

⑵ ワークショップ

ワークショップは2019年12月10日と2020年1月22日の2回開催した。両者とも14時30分受付開始、16時終了とし、授業1コマ分にあたる約1時間半で実施した。場所はワークショップ実施に適切な人間社会4号館1階造形講義室を使用した。ワークショップの内容としては、色に関わる一つの技法として絵の具を実際に作り、身近なものから色を出す体験をすることで彩色への理解を深めるという目的のもと、「野菜の絵の具づくり」を行った。具体的には、野菜と膠から絵の具を作成し、膠の固まる時間を利用して膠や他の画材についての講義を行うとともに、完成した絵の具でしおり（お土産）を作成するという内容となっている。

次にワークショップの企画から実施の流れについて述べる。ワークショップ案は基礎班でそれぞれ企画案を作成し、実習生全体でコンペを設けた。その後、投票を行い、結果「野菜絵の具づくり」に確定した。開催に向けてワークショップ班が結成され、企画の概要や大まかな流れ、タイムスケジュールなど、企画案の検討を行った。ワークショップ班内で検討した企画案は、実習授業内で全体に共有され、意見交換も実施した。野菜絵の具を作成するにあたって、実験を行った。様々な野菜を買い出しした後に下処理をし、それぞれ液状にしたものから発色がよく絵の具に適していると

図9. ワークショップ準備の様子

図10. ワークショップの様子

思われるものを5種類（ニンジン、タマネギの皮、ムラサキタマネギ、ピーマン、ナスの皮）選抜した。また、絵の具づくりに必要な道具や手順を確認した。実験結果は、夏休み明け最初の実習授業内で全体に共有するとともに、一回目の反省をもとに二回目の実験を行い、絵の具づくりの際に重要な膠の使用方法を確認した。野菜の汁と膠を混ぜ合わせることで、実際に絵の具を作成し、結果を全体に共有した。ワークショップの開催が目前に迫り、教員を交えてワークショップの開催日や場所を決定するなど、本番に向けた事前準備が始まる。ワークショップ班は、タイムスケジュールやシナリオを作成し、必要な物品と講義内容を検討した。ワークショップ担当者が確定すると、担当者全員でシナリオの修正や告知メールの作成、会場の下見を実施し、さらにワークショップで配布するレジュメや、ショートブレイク等で使用するパワーポイントの作成も行った。リハーサルを実習授業内で実行し行い、その結果を基にシナリオを改良し、本番に備えた。今年は「博物館教育論」の授業内でのリハーサルは実施しなかったが、博物館関連の授業履修者にワークショップの告知を行った。当日の動きとしては、13時～14時半を準備時間に充て、14時半からワークショップを開催した。準備時間では荷物の運搬や野菜の下準備、当日の流れの確認を行った（図9）。開催場所の造形講義室は、展覧会の会場である資料館からは遠いため、資料館前を集合場所に指定し参加者を誘導した。当日は進行役、見回り役、準備役などゆるやかに役割を分担してワークショップを進めた。ワークショップを進行しつつ、洗い物やごみのまとめなど片付け作業を同時並行して行った。ワークショップには2日間で計22名が参加した（図10）。

⑶ 写真展

来館者参加型の展示として、資料館収蔵資料の紹介以外にも、日常に溢れる様々な「色」に関心を持ってもらうことを目的に「写真展」を行った。この企画では、企画展で扱う「赤・青・金」に関する写真を事前に投稿してもらい、集まった写真を資料館で展示することで色への関心を増進するとともに、より多くの人の来館の促進を目的とした。加えて、募集した写真の中から、会期中に投票箱を設け、優秀作品の選定を行った。

図11. 写真展の様子

詳細な募集要項を作成するとともに、学内の

教員・学生に向けたアカンサスメールで募集を行った。募集要項としては、「投稿できる写真は一人3枚まで」、「赤・青・金のいずれか一色以上を含む写真であること」、「撮影者のオリジナルであること」、「過度な加工は行わないこと（ホワイトバランスの調整や簡素なフィルターを掛ける程度は可能）」、「著作権・肖像権等を遵守すること」と設定した。写真の募集はアカンサスメールで告知したが、募集した写真を受け付けるメールアドレスについては、担当班の実習生が作成し管理した。募集した結果41枚の写真がエントリーされた。この写真のうち期間を通して展示する写真は菅原教員を経由し、しまうまプリントに2L版で外注したものを展示した他、iPadに映す展示も行った（図11）。iPadの展示の際には、iOSに付属するアクセスガイド機能を利用するとともに、一般観覧者の操作の制限を行った。また、会期中に優秀作品を選定し、資料館でA3光沢紙に印刷して展示を行った。加えて、投稿された写真のうち、優秀作品に選出された3作品のみ、今後もアウトリーチ展で展示されることになったため、3作品の投稿者に連絡を取り、使用許諾書への署名などを依頼した。許諾書の送付先など具体的な連絡は資料館に引き継いだ。

⑷ 評価

ミュージアム・ツアーについて、実習時間内でリハーサルを実施していたため、当日も円滑な進行が行えた他、参加者とのコミュニケーションが十分にとることができ、展示資料への興味を持ってもらう目的を果たせたと考える。加えて、事前に参考となる資料を用意し、参加者に配布することで、より分りやすい解説を試みることができた。一方で、ミュージアム・ツアーの参加者のほとんどは博物館実習関係者であり、関係者以外に対する宣伝に工夫が必要であった。加えて、事前準備として、参加者からの質問の想定やより詳細な情報、豆知識などを用意する点、参加者全員が資料を見やすいように立ち位置を決めておく点など考慮する必要があった。

ワークショップについて、企画の際に参加者が楽しめることはもちろん、新たに学ぶことができるようなものとする点に重点を置くことで、教育的意義について考えることができた。参加者が個人で「モノ」を作成するだけで終わらないように、参加者同士が協力できるよう促したり、講義を交えて学びの時間を設けたりすることで、新たな発見の場を提供できたと考える。また、ワークショップ開催に必要な作業を実習生内でうまく分担して進めることができたため、レジュメやパワーポイントなどの細部まで気を配る余裕があった。一方で、参加者の中には留学生もいたため、様々な方の参加を見越し、レジュメやパワーポイントに英語表記を入れるなど工夫すべきであった。加えて、時間調整やワークショップ中の実習生の動き、進行の手順、参加者からの見え方など、ワークショップ進行中の作業について、より詳細に詰める必要があった。

写真展について、初めての試みということもあり、ノウハウもなく試行錯誤することが多かったが、41件ものエントリーを受け付けることができた。学内の学生や教員に対し、企画展を広告するとともに、来館を促す一因となったと考える。一方で、告知メールやスケジュールが直前となってしまい、より早い段階で行う必要があった他、予算申請やパネル作成など資料館職員との打ち合わせを早い段階で行うべきであった。以上の反省点を踏まえ、今後、来館者参加型企画の参考になることを願う。

（岡部）

7. 学生展への大学資料館の関わり

学生企画展は、平成26（2014）年度の「植物図「館」」以来、金沢大学資料館の重要なイベントになっている。毎年学生ならではの新鮮なテーマで来館者の興味を引くことに成功しており、各年度の年間来館者数の２割前後（千数百～二千名前後）を占める人気企画である。

本章では今回の学生企画展への資料館の関わりについて資料館員の立場から述べることにする。

今回の学生企画展「いろは」は、既述の通り資料の「色」に着目した企画展である。毎年思うことだが、今回も過去の学生企画展とは全く異なるテーマとなり、学生の柔軟な発想力に感心させられた。この学生企画展に対して、資料館員は、企画書・パネル・キャプション・ポスター・チラシ・広報の原稿チェック及び校正、案内文のウェブサイト掲載、パネル等作成作業のための地下準備室及び道具類の提供、展示室での陳列作業のサポートを行った。金沢大学の学芸員養成科目の一つである博物館実習の授業として、企画立案・資料調査・原稿作成・展示陳列作業・広報・撤収作業等、学生企画展に関わる全てにおいて博物館実習生が主体となっているが、文部科学省の『博物館実習ガイドライン』[1]に示された「館園実習」という位置づけに加え、資料館の年間事業でもあるため、資料館員は実務体験の場を提供しながら補助的に関わっているのである。

本学の博物館実習生は、毎年真面目で一所懸命に実習に取り組んでいるという印象があるが、どうも夢中になって頑張りすぎるきらいがあり、「いろは」においてもその点は悪く出た。もちろん実習生にとって、自ら企画展を作ることは初めての経験であり、各作業にどれくらいの労力や時間がかかるのか分からないだろう。そのため、展示経験を有する者がある程度の分量調整・軌道修正をする必要があるが、資料館側に学生企画展の準備状況がなかなか伝わって来ず、実習生がやりたいことが目一杯詰まった企画案が作られていった。そして、資料館内のフォント・文字数・パネル枚数等のルールも考慮されないまま、展示開始まで１か月を切った10月下旬になって統一感に欠けるパネル・キャプション原稿が資料館に回ってきた。それらの内容も、読めば一人一人が頑張って調べたことがよく分かるものではあったが、各資料に関する事実誤認等も少なからず見受けられ、資料館の手を入れざるを得なかった。今回の博物館実習は、『博物館実習ガイドライン』に示された適正人数のほぼ倍となる29名が受講しており、全員の想いをできる限り反映させた結果とすれば、こうなることは仕方なかったのかもしれない。とは言え、資料館も学生企画展の準備にもっと早い時期から深く関わるべきであった。結局、展示開始まで１か月もないタイミングで資料館からパネル・キャプションについて大幅な修正を求めざるを得ず、学生の負担が短期間に集中することになってしまったことは反省点である。

このような混乱が多少あったものの、最終的にはこれまでにない色彩豊かな美しい展示になった。普段は茶褐色や白色等、地味な色合いを呈している資料館展示室が、「赤・青・金」の三色が映える華やかな空間に変わった。一般的な感覚では「赤・青・黄」の組合せが思い浮かぶだろうが、黄ではなく金としたことも展示室内での輝きを生み出すことにつながっていた。それだけではなく、金という色は金箔工芸を伝統産業とする金沢らしさもあって、実に良い選択であった。

展示順もよく考えられていて、最初に赤・青・金各色の代表資料を示した後、派手な赤のセクション、落ち着いた青のセクション、きらびやかな金色のセクション、そして多彩な写真展と移って行き、観覧者にとって適度な変化のある流れになっていた。

今回の展示品はいずれも彩色された資料であるがゆえに、展示照明についての工夫も普段以上に必要だったが、照度計を確認しながら国際博物館協会（ICOM）の照度基準（光に非常に敏感なも

の：50lx、光に比較的敏感なもの：150-180lx、光に敏感でないもの：特に制限なし）[9]を満たしつつ、各資料の色合いも十分伝わる照明に仕上がった。

このように、展示陳列作業にあたっては、博物館実習生が作成した企画・展示案がよく出来ていたため、資料館から意見することがあまりなく、わずかな実技的アドバイスのほかは、展示スペース・展示什器・照明器具等を提供する程度にとどまった。「いろは」は、まさに文字通りの「学生企画展」として結実したのである。

さらに、資料館の手は離れているが、教育普及活動についても充実しており、ミュージアム・ツアー、ワークショップ、写真展のいずれも完成度の高さに感心した。

以上、学生企画展への資料館の関わりについて、資料館員の立場から述べてみたが、改善すべき点はあるものの、「企画立案・資料調査・原稿作成・展示陳列作業・広報・撤収作業等、学生企画展に関わる全てにおいて博物館実習生が主体となる」という本学における博物館実習の最大の長所は今後も大切に生かして行くべきである。これは、館園実習等を通して学芸員に必要な知識・技術の基礎・基本を修得するという本授業の主目的から見ても重要なことである。本学の博物館実習の受講生から、近年毎年のように学芸員採用者が出ていることがその良い証左である。学芸員という職業は、各館十年に１度くらいの間隔で１名程度の募集が出ることが多く、非常に狭き門であるが、その採用試験に合格できるほどの技能が学生企画展を通して身に付いているのである。

（松永）

註

1　文部科学省2009『博物館学芸員ガイドライン』

2　笠原健司「金沢大学資料館における博物館実習の取り組み」『金沢大学資料館紀要 No.11』2016年3月、金沢大学資料館、55-56頁。

3　同論文57頁。

4　笠原健司，笠原朋与，野村将之，虫明慧子，渡辺司，有村誠「学生による企画展の振り返り」『金沢大学資料館紀要 No. 12』2017年3月、金沢大学資料館、1-20頁。

5　小口 歩美，川邊 咲子，本庄 有紀，笠原 健司，菅原 裕文，河合 望「学生による企画展の報告「ハカリモノ―文系学生が紹介する科学実験機器―」」『金沢大学資料館紀要 No. 13』2018年3月、金沢大学資料館、27-50頁。

6　鈴木 彩可，米田 結華，室谷 颯花，北澤 怜子，笠原 健司，菅原 裕文，河合 望「学生による企画展の報告「バンカラ寮生類～金大寮史124年～」」『金沢大学資料館紀要 No. 14』2019年3月、金沢大学資料館、19-38頁。

7　松下 梓，岡田 優太，櫻井 宇佳，藤本 夏実，笠原 健司，菅原 裕文，河合 望「物録（モノローグ）― 資料たちの波瀾万丈な「モノ」ガタリ」『金沢大学資料館紀要 No. 15』2020年3月、金沢大学資料館、1-20頁。

8　「金沢大学資料館Virtual Museum Project」〈http://kuvm.kanazawa-u.ac.jp/〉（最終アクセス：2021年1月23日）

9　藤原工 2014『学芸員のための展示照明ハンドブック』講談社